

## 翻 訳

## 富豪の娘たち（1幕もの戯曲）

辻井榮滋訳&amp;ノート

場面

マスターズン：誰だい？〔椅子にすわったまま向きなおる。エドナに気づく。〕よう！ おまえ、いつ入って来たんだい？

エドナ：パパったら、びっくりするじゃない、…もどったばかりよ。〔巻きタバコをもう1本取って。〕

マスターズン：新聞を読みながら眠りこんでたんだ。何時だい？

エドナ：パパたちはもうみんな寝ている時間よ。2時だわ。

マスターズン：舞踏会は楽しかったかい？〔伸びなどをしながら、起きあがる。〕

エドナ：ええ。〔と言って、父親の椅子のところへと進む。〕

マスターズン：足が痛くなるまで踊ってたんだらう。

エドナ：そんなところね。

マスターズン：大勢行ってたのかい？

エドナ：珍しく大勢だったわ。

マスターズン：スミスソンを早くに家まで送っていったんだろ。〔椅子のところへと舞台を進む。〕

エドナ：ええ。アーノルドたちが車で私を家まで送ってくれたの。〔と言って、タバコを吸いながら、舞台中央の左手の椅子にすわる。〕

マスターズン：君にそういうもんは吸ってほしくないな。

エドナ：パパ，時代遅れよ。みんな吸ってるわ。私なんか12歳の頃からずっと吸ってるわ…はつきり言うと，学校で覚えたの。

マスターズン：すると，あの費用のかかる学校で覚えたというんだね？

エドナ：タバコも…ほかのことも。〔警察の警笛が外でする。〕警察だわ……〔玄関の呼び鈴が鳴る。〕出るわ……

マスターズン：なあ，こんな時刻におまえが玄関に出ちゃいかん。私が出よう。

エドナ：たぶん召使いたちはみんな寝ているわ。放っておけばいいのよ。誰かが家を間違えたのだわ。

〔マスターズン，玄関の広間を抜けて，中央のドアを退場する。〕

巡査：〔外側から〕ご迷惑をおかけして，すみません……われわれは，このお宅まで女性を追ってきたものですから。その女性は，表戸の鍵を使って中に入りました…今さっきわれわれを撒いたばかりです。

マスターズン：それは思い間違いですな，おまわりさん。君たちの追ってきた女性など，この家の表戸の鍵をとうてい持ってるはずがないだろう。

巡査：たしかにここに入ったんです。

マスターズン：ばかな！ それにしても，こんな寒い所にじっと立たさんといてほしい。自分で調べなければならぬのなら，入りたまえ。〔玄関の広間に入って，中央のドアから入り，そのあとに巡査とフランク・バートがついて来る。〕ところで……つまり……いったいどういうことかな？

巡査：それは，つまりですね，今度の新しい法律が施行されて以来，われわれは商業地区の下宿やレストランを見張っていません。今夜も，個室のあるレストランを手入れしました。そこで見つけた者は全員署まで連行せよ，との命令を受けたのです。私は，この若いやつとその女友だちを引き連れていました。やつは，つまりいて，足をくじいたふりをしました。女性のほうは，立ち去って，タクシーに飛び乗りました。私には彼女の顔が見えませんでした。毛皮でおおっていたのです……が，なかなかのハイカラでした。私はやつを別のタクシーに押しこんで，若い婦人のあとを追いました。彼女は先の街区で降り，われわれはもう1区画手前

で止まって、彼女のあとを追いました。そしてたしかに、ここに入ったのです。誓ってそう言えます。

エドナ：もし証人席に立てば、そんなことを誓えやしないわよ。あなたはただ混乱して、間違っただタクシーのあとを追っただのよ。

巡査：〔首の向きを変えずにエドナを見て、それからパートのほうをふり返る。〕 た……ぶん！

マスターズン：ちえっ、おまわりさん、これはひどすぎるよ！ ここには、私自身と私の娘だけしかいないだろ。

巡査：〔あてつけにエドナを見て。パートに向かって〕 君は、その若い婦人に前に会ったことがあるというのは無理だろうね？

パート：あるもんですか！

マスターズン：〔怒りの余り早口に言いながら、舞台を移動する〕：このあほうめが！ 私の娘が君たちの追ってきた女だとしても君は厚かましくも言おうというのか？ これでは君は、自分の仕事をなくしてしまうぞ…君たちは、どこの家にいるのかわかっているのかね？ 私はジョン・マスターズンだ。〔と言って、舞台右前方へ〕 けしからん！ 一体この世はどうなるんだ？ 人がこんなふうに分家の家で侮辱されるなんて。

巡査：〔その態度がころっと変わって〕：侮辱だなんて、とんでもありません。もちろん、思い違いでした。マスターズンさん、こちらがあなたのお家だとは存じませんでした。すみませ…

パート：この婦人と紳士にずいぶん長くご迷惑をおかけしなかったですか、おまわりさん？

マスターズン：かけたとも、……それだけじゃない……どこかの売春宿からわけのわからん男たちを品行方正な人の家に引きずりこんでな。こんな類いの間違いをもう少しやらかせば、昇進どころか停職処分を受けることになるぞ。〔舞台を横切ってテーブルまで行く〕 若い、今回は君にとっても教訓にしなくちゃね。それじゃ、お休み、おまわりさん。誰だか知らんが、そのあばずれ女が捕まるといいね。私の助言だが、その女を捜すのに、もうまっとうな家には押し入ってきちゃいかんよ。

〔巡査は引きかえそうとする。玄関口のところで立ち止まる。〕

巡査：その女性は、えらく迂闊<sup>うかつ</sup>でした。これを落としました。〔と言って、マスターズンに宝石のついたブローチを手渡す。するとマスターズンは、横断<sup>うかつ</sup>して行って、それを調べてみる。〕 そ

こそこは値の張ったものに違いないな。

バート：僕と一緒にいた婦人がそれを落としたって、はっきりはしないんでしょ。

巡査：いや、そうなんです。絶対に確かです！それが彼女の服から落ちるのをこの目で見ただからです。彼女の名前と日付が、裏に彫られているでしょ。残念ながら、性のほうは刻まれてなかったですが。

マスターズン：う……ん。そりゃあ、大いに残念だ。高価なものでもあるし。たぶんその婦人も、今後はもっと気をつけるだろう。君は私の好奇心を呼び覚ましてくれたよ、おまわりさん。この一件をどうするつもりかい？連絡があるまで取っておくのかね？

巡査：そうです。

マスターズン：それから？

巡査：それで、明日の朝の尋問後に、たまたま新聞沙汰にならなければ、その若い婦人が厄介をこうむることは何もないはずですよ。かと言って、彼女が私を撒いたなんて考えるのはいやですからね。できれば、明日の朝警察裁判所に出頭するようにしてもらおうのが、私の務めです。

マスターズン：できればね。まあ、たしかに彼女は君を撒いたが、君がここにいるからといって、彼女を見つけられやしないさ。私は、身分のある若い女性たちが、今回の件をどうやら君が考えているように、俗界で下層連中とはしゃいでいるとは知らなかったな。

巡査：あなたも、ジ・アヴェニュー高級住宅街の名士の人たちだってこうした些細な事件で捕まるのを知れば、驚かれますよ。

マスターズン：驚いたよ。それじゃ、まあ、お休み、おまわりさん。手を貸せなくてすまん。私と娘は、君が玄関のベルを鳴らす直前に舞踏会から帰ったところでね。われわれは、誰も見なかったよ。お休み。

巡査：〔舞台前方中央へと歩きだす。また引き返す。〕ブ…ブローチ…ですが。

マスターズン：ああ！ そう…そう…ブローチ。〔エドナに鋭い目つきを送ってから退場する巡査にブローチを手渡す。マスターズンは、送り出すと、それから舞台中央入り口に入ってきて、そっとすすり泣いているエドナを見おろしながら立っている。〕

マスターズン：そのブローチは、私がおまえの誕生日にあげたものだ…その男にどこで出会った

んだい？〔エドナはすすり泣く。〕

マスターズン：〔舞台をエドナのほうへと寄っていく。〕 答えてごらん。

エドナ：この部屋だよ。

マスターズン：誰？ 何者だい？

エドナ：電話の修理をしにきたの。

マスターズン：電話の修理をしにきたって？ けしからんな！ それで？〔舞台中央入り口へと動く。〕 知りあってどれぐらいになるんだい？

エドナ：3ヵ月。

マスターズン：それからずっと出会っているのか？〔エドナはすすり泣く。〕

マスターズン：答えなさい！

エドナ：ええ。

マスターズン：信じられん……自分の娘が！ おまえは、王女みたいに育ってきた。おまえは、私の持つてゐるすべてだった。〔舞台右前方へと動く。〕 そしておまえのために、これ以上ない労働者みたいに昼も夜も机に向かってもう働きづめだった。おまえのためにこそ、夜も寝ないでおまえのための金をかせぐ方法を企ててきたんだ。〔舞台の中央へと移動する。〕 よくもおまえがこんなふうにして私の面目をつぶせるなんて、思いもつかなかったよ。私の報いは、おまえが幸せで、願いがかなわないことなどないという思いだった。それに、おまえがジョン・マスターズンの娘で、無限の富の相続人の娘と指摘されうらやましがられることだった。おまえのために私の財産を旧世界の称号（貴族）と結びつけるのが、私の大望だったのだ。おまえは私の誇りであり喜びだったのに、今何をやってるって？ 電話の修理に来る男と低俗な恋愛をして、繁華街の売春宿で落ちあい、手入れを受け、…自分の玄関口まで追い立てられるとはな。〔前舞台の中央を横切る。〕 こんなことは、いつ何とき漏れ出すか知れない。記者につかまったら、もみ消すのに大金がかかるぞ。〔舞台前方中央を横切る。〕 どうするんだ？

エドナ：楽しくやりたかったの。

マスターズン：楽しくやりたかった？〔舞台右前方へ横切る。〕 楽しくやってなかったのかい？ 正直な話、ずいぶん高くついてるんだよ。

エドナ：それなのよ！ パパはドルとセントでしか考えないんだから。売買。馬、家、土地、株、債券、財産所有権、肉親、パパ自身の身内とか。物を買ったり売ったりするのに忙しすぎて、パパは自分の女性たちが人間だということを忘れてるわ。人間じゃなくて、パパの大きな成功を反映する宝石をかけておく物なのよ。

マスターズン：願いがかなわなかったことなどあるかい？〔エドナのほうへと向かう。〕

エドナ：そこがまさに厄介なところなのよ。これまでずっと何だって手にしてきたわ。〔と言って立ち上がり、ソファのほうへと横断していく。〕パパは私をぜいたくに暮らせようとしたし、私の欲しいものなら何だって、思いきり長く声をあげて泣いたら、お月さんだって手に入れられると思わせたわ。〔ソファにすわる。〕それで私は、自分と同じほかの大勢の者みたいに、病んだ神経をもってこの世に生み出されてきたの。

マスターズン：病んだ神経だって！

エドナ：そう、……こんな私にした人たちの側からすれば、私が生まれる前からすごく欲しいままにさせることで病んでしまったというわけ。

マスターズン：そんな当世ふうのくだらんことをおまえは学校で習ったんだな。〔エドナのほうへと進む。〕

エドナ：世間から学んだのよ。〔舞台右手へと移動して、椅子にすわる。〕私は神経衰弱に生まれついて、他の金持ちの娘たちと高くつく学校で育ったわ。みんな生まれつきまかせていて、みんな好奇心でうずうずして、すり減った神経はあらたな喜怒哀楽を叫んで要求し、人生の背後に潜む謎を勝ちとろうとしてるわけよ。

マスターズン：ヒステリー！

エドナ：父親たちのお金なんて、私たちには単にすごい放縱の意味しかなかったわ。私たちは、絶え間なくタバコを吸ったし、…甘いものでも、アルコールがいっぱい入ったものや、小説だって、母親たちなら恥ずかしくて読めないようなものにお小遣いをつかったわ。話の中身だって、今パパが出かけるクラブで口にすれば恥ずかしいと思うようなもので、いまだに神経状態に駆り立てられるの。大いに食べて飲んでタバコを吸うのは、興奮するためだし、盛装するのも男たちを興奮させるためよ。好色の老人たちや淫らな若い男たちが耳もとでささやく淫らなことにも笑って聴き、その間ずっと、猿の女たちのように必死に自分の宿命を追い求めているの。

マスターズン：それは、ヒステリックな誇張だな。

エドナ：ほんとうのことよ。

マスターズン：〔エドナのほうへと進む。〕それじゃ、王女だったかも知れないのに、結局は、遊女にすぎないとなると、おまえはどうするつもりなんだい？

エドナ：遊女なんかじゃなくて、愛する男への束縛のない贈り物よ。

マスターズン：並の労働者だな。

エドナ：ありがたいことよ！

マスターズン：卑しい逢瀬を楽しまねばならないのだとすれば、どうして自分と同じ階級の男を選べなかったのかい？

エドナ：それってどういうこと？

マスターズン：結婚、品位だよ。

エドナ：私みたいな、別の神経衰弱の患者との結婚で終わってしまう「卑しい逢瀬」が、どうして品位を意味するのかわけがわからないわ。それならジョン・マスターズのうらやましがられる娘ばかりでなく、誰かよくわからないけど誰彼氏、したがって品行方正な人のうらやましがられる妻になるわけでしょ。私たちのとんでもない関係がとんでもない結婚で終わるわけね。〔と言ってヒステリックに笑う。舞台後方右へ進む。〕

マスターズン：社会に対する自分の責任というものを覚えることができななかったのかい？

エドナ：そんなのまるで知らなかったわ。そんな大金が世の中での私の高い地位に適するようにつかわれるカリキュラムで、私の教育者たちはそういうことを含めるのを忘れていたのよ。〔舞台後方左へ進む。〕彼らが私に教えたのは、私を喜ばせることだけだったわ。パパの大金はみな、社会に対する私の責任を学ぶ課程を買うのに役立てなかったわけ。

マスターズン：〔エドナのほうへと進む。〕そんなおまえなどまるで知らなかったよ。

エドナ：パパがお金もうけにもっと時間を減らしていたら、私のことをわかってたでしょうに。私は子供の頃、いつだってパパのことおっかなかったわ。

マスターズン：自分の父親のこと、おっかなかったって……

エドナ：パパは、私にとっては王様だったの。万が一にも父親でなど決してなかったわ。〔マスターズンが舞台を横断して寝椅子へと移る。〕子守女と私はよく、郊外の小きれいですてきな1戸建て住宅の並びのそばを車で走ったものよ。家々の正面には花々が咲いていて、子供たちがそこらじゅうで遊んでいたわ。時々男の人が町かどで電車、ごく普通の路面電車から降りてくるのを見かけたものよ。彼は、娘を抱きあげて肩車にしたの。それから、私と同じ年ぐらいの小さな女の子たちの1人が、遊び友だちを置いていって、ワァーッと喜んで父親に飛びついていった。両手を父親の髪に埋めて、しっかり離さなかった。地味な白の服を着た小柄な女性が、門まで出てきたの。彼は彼女の体に腕をまわして、3人で住宅の1つに入っていった。ああ、私はあの小さな女の子のことをよくうらやましく思ったものよ。

マスターズン：そんな必要なかったのに……

エドナ：なかったって？ あの子のおもちゃが家じゅうに散らばっていて、父親が床にすわって一緒に電車遊びをしているのが想像できたわ。よく子守女に頼んで毎日そっちのほうへ車で連れてもらい、その時子供っぽくも決心したわ、いつか私もあんなちょっとした家を持つんだって。よく子供部屋の大きな敷物の上に横になって、暖炉の火の前で、とても寂しいちょっとしたことを考えたものよ…パパには金持ちの女の子がどんなに寂しいものかわからないわ……でも私にはわかる……私にはわかるわ！ パパが家に帰ってきたとき、勇気を出して出迎えに駆けつけようとしたんだもの。

マスターズン：どうしてそうしなかったんだい？

エドナ：パパはめったに家に帰ってこなかったし、あのご立派な召使<sup>がしら</sup>は何て思うだろうかと心配だったわ。1度パパが書斎にいるのを知っていたとき、ドアのところまではい寄って行って、そこに立ったんだけど、中に入るのがこわかったの。それで、莫大と言っていい何百万ドルもの財産の、哀れで孤独で小さな女相続人である私は、大きな玄関に立って、しっかりぴたっとドアに顔をくっつけて、必死に中へ入ってパパに顔をすり寄せたくって仕方がなかったの。ほら、あの住宅の小さな女の子が、たぶんまさにあの時に彼女の父親の膝<sup>ひざ</sup>の上にすわっていたようにね。

マスターズン：エドナ、……私はそんなこと……〔舞台中央を横断する。〕

エドナ：だめ、ため、待って、パパ……パパは、私の願いをすべて満たすために生きて、って言うんでしょ。でも私の欲しいのは、たった1つだけよ。〔と言って立ちあがる。〕あれやこれやなんて、いっさいなくていい…そんなの欲しくないの。私の欲しいのは、連れあいと一緒の、小さな住宅だけ。それに、父親を出迎えに走っていくのを恐れない小さな娘よ。社会に対する私の責任のことなど何も知らない、……そんなのもういいわ、…恥とか、取るに足りないこととか、ヒステリックな愛情のなさとか。そんなのはもう何もいらぬわ。自分の人生を自分なりに、ごく普通の労働者と暮らしたいの。それが、唯一偽りのない、唯一まっとうな、唯一自分に合った

生き方なの。

マスターズン：おまえを売春宿へ連れこんだ例の男……

エドナ：彼は、そんな所で私と会いたいなんて決して思わなかったわ。私が彼と出会えるのなら、どこで会おうがかまやしなかったし、あの夜あそこにはほかにも私の仲間がいたって確信してるでしょ。〔父親のほうへ進む。〕パパ、もしあの人が私を受け入れてくれるなら、2人の結婚を認めてくれるわね。

マスターズン：受け入れるって？ そいつは、このチャンスに飛びつくさ、……

エドナ：まあ、そんなに確信してるわけじゃないの。パパ、お願いだから、……

マスターズン：エドナ、嬢ちゃん、私がおまえの幸福のためなら何だってしてあげるのわかってるよね、……

エドナ：それじゃ、急いで、警察署に電話して。さあ、彼を放してやって、…今すぐよ…パパならうまく始末をつけられるわ。パパはジョン・マスターズンでしょ、何だってできる、警察ともね、…さあ……急いで……

マスターズン：だが、これはどうにもならない、おまえの幸せのためにはならない……

エドナ：やってくれないの？

マスターズン：できないな。おまえは、のぼせ上がってるんだ。

〔エドナはマントを取って、ドアのほうへ行きかける。〕

エドナ：パパがそれほど考えるつまらない社会が正気なのだとしたら、それならうれしいわ、私のはのぼせ上がってるわ。

マスターズン：もしおまえが出ていくというなら……

エドナ：それで、もし私が出ていくというなら、どうなの……

〔電話が鳴る。マスターズンが出る。〕

マスターズン：何だって？ 何？ ピストルで自殺した？ そんなことを言うのに午前3時に私

を起こすとは、何事だ？ その男のポケットに私の娘宛の手紙が、だって？ 信じられん！ 私の娘は、そんな男など、知らん、……

エドナ：パパ！ フランクよ、……自殺したのよ……

エドナ：〔どっとヒステリックに笑い出す〕：さあ、……もう社会に衝撃を与える必要もないわ、……パパは、自分の好みの称号を持った人物との結婚を買えるんだから。〔戸口の仕切りのカーテンを引きずりながら、気絶してしまう。〕

幕

### 「富豪の娘たち」訳者ノート

このところ、J・ロンドンの戯曲の翻訳にはまり込んでしまった感がある。『人間の漂流』の1冊の中に偶然「よしまな女（開幕劇）」を見つけ、本誌第66巻・第3号に発表。その後、立て続けに「青年英語教師のアメリカ留学記」をⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳと発表し続けた（第66巻・第4号、同5号、同6号、第67巻・第1号）あと、さらなる戯曲として発表したのが「女人禁制のボクシング・ジムに男装の麗人登場」（原題“The Birth Mark”「母斑」）であった（第67巻第2号）。人生晩年にさしかかった者にとって、戯曲という人間の生の声をわかりやすく、しかも深く伝える表現形式は、最適と申せるのかも知れない。

さて、「富豪の娘たち」だが、原題を“Daughters of the Rich”という。「金持ち」でいいが、本作の場合半端じゃない金持ちであり、「大金持ち」ないし「富豪」としてみた。……

もう1点冒頭のタイトルの下に“訳者名とノート”の上に初めて原作者の名前を添えなかった。R・キングマンによれば、「「金持ちの娘たち」……といったいくつかの場合、彼は作家たちの作品の売れ行きがよくなるように、自分を著者ないしは共著者として載せる権限を彼らに与えた。」（拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』本の友社、pp.219-220）という。このところ、資料やアドバイスをもらっているハンティントン・ライブラリのナタリー・ラッセル女史によれば、“…… this play was actually written by Hilda Gilbert, but published under Jack’s name with his permission.”（June 12, 2018 付）とある。但し、作風や風潮からしてJ・ロンドンの他作品と何ら変わることはなく、当時の世相をよく反映している作品であることは間違いない。

